

誰もが抱く様に、加藤秀隆もまた劣等感を抱いていた。

自分はあるにきたりな人間だと理解していた。

しかし彼が他の有象無象と半歩違ったのはその感情を直視していた点だった。

そしてその感情を正しく行動に置換していた。行動とは、毎日必ず行う勉強と早朝のランニングだった。彼は努力家だった。真面目過ぎるとも言えた。

夕餉を済ませた後、母との何気ない会話をした。今日は蝉がよく鳴いていたとか、大輪のひまわりを見たとか、どうやら明日は満月で今晩は運が良ければ彗星が見えるらしいとか、そういう話をした。親子仲はすこぶる良いようだった。やがて彼は自室にこもり、机に向かった。

机の上を照らす灯りだけが点けられている。室内は薄暗かった。

ペンを走らせる音。

消しゴムを滑らせる音。

紙をめくる音。

問題に頭を悩ませる声。

それらだけが室内に響いた。やがてそこに異音が割り込んだ。

ピピピ、ピピピ、ピピピ。目覚ましが鳴っていた。長針短針が協力して示す時刻は二十二時二〇分だった。それは就寝の十分前であることを知らせるアラーム音だった。英文の日本語訳を書いていたペンは置かれ、ペンを握っていた手は腕と共に頭上に伸ばされた。日本語訳はまだ途中だったが、時間で区切ることを絶対のルールとしていた。

「ふーっ……」

勉強机は窓辺にあった。手を伸ばせば窓はすぐに開いた。夜風にカーテンがゆれる。

「ああ、いいかぜ」

秀隆は冷房を消した。途端に室内にぬるかぜが吹き入る。しかし秀隆にはそれがよかった。

卓上の灯りを消すと、当然室内は暗くなった。必然、夜空がよく見えた。

秀隆は母の言っていたことが確かなことを知った。星々と月が綺麗によく見えた。

じゃあ彗星もよく見えそうだと思いつつ、何時から流れるのかは聞かなかったな……、と口惜しんだ。しかしすぐに、それでもギリギリまで待ってみよう、と切り替えた。

それから二分三十二秒経過した頃、月の横から一条の碧い線が引かれ始めた。異質なことに、ゆっくりとゆっくりと、まるで天上から神が線を引いているようだった。秀隆は真面目だったが天体についての知識は人並みだった。彼は次第に光を増すそれを、そういうものだと思って観続けた。異常だ、と知識のない彼が思うまで一分以上の時間はかからなかった。彗星が急に光を増したのだ。

「なんだあれ……ああいうものなのか……？」

彗星らしきものは光を維持したまま、やがて動かなくなった。

秀隆はしばらくそれを観続けたが、やがて観飽きて床に就いた。

翌日、天体に詳しい同級生に訊ねたところ、不思議そうな顔を秀隆は向けられた。

「彗星は今日だよ」

大きな疑問符が浮かんだ。